

身近になった ボランティア活動

近年、日本ではボランティア活動に対する関心が高まっています。社会のためだけでなく、ボランティア活動をする人にとっても得るものが多いことから、多くの人がボランティア活動に関わるようになってきています。

日本では、1970年代、1980年代を通じて、ボランティアということばが一般に浸透していきました。1970年代は、家電製品の普及などによる家事の省力化を背景に、人々の時間的なゆとりが増え、社会参加意識が高まりました。また市町村の社会福祉協議会のボランティアセンターに国の補助金の交付が始まるなど、行政もボランティア活動に注目するようになりました。1980年代は、日本国際ボランティアセンターが設立され、国連ボランティアに日本から初めて参加するなど、国際的なボランティア活動に関心が高まりました。

1990年代は企業の社会貢献活動に対する関心が高まりました。「ボランティア休暇」を取り入れる企業が現れたり、経済団体連合会に利益の1%を社会貢献に支出する「1%クラブ」が発足したりするなどしました。また、1991年には、利子の一部を国際ボランティア活動に寄付する「国際ボランティア貯金」(2007年に終了)が開始されました。

ボランティア元年

徐々にボランティア活動への関心が高まるなか、1995年、死傷者約5万人を出した阪神・淡路大震災では、ボランティアが全国から被災地かけつけました。地震発生後の13ヵ月間でおよそ140万人が活動したと推計されていますが、その多くは初めてボランティア活動をした若者でした。炊き出し、救援物資の仕分け・配送、ごみの収集・運搬、避難所での作業補助、被災者に対する情報提供など多岐にわたる活動は注目を浴びました。ボランティアの活躍が評価され、ボランティア活動に関する関心が大いに高まったことから、1995年は「ボランティア元年」と言われています。その後、各地で火山噴火や地震、台風によ



1995年1月に起きた阪神淡路大震災後、被災者に炊き出しをするボランティア

る水害などの災害が起こるたびに、多くのボランティアが被災地で活動するようになり、いまや災害時のボランティアは欠かせない存在になりました。

増えるボランティア

災害時だけでなく、日常的にボランティア活動に関わる人も増えています。2005年度現在、全国の社会福祉協議会が把握しているボランティアの人数は740万人弱(総人口の5.8%)で、調査が始まった1980年から2005年までの25年間で、約4.6倍に増加しています。ボランティア活動を行う人の数や割合は、ボランティア活動の定義や調査の仕方によっても異なります。別の調査(平成13年社会生活基本調査・総務省)では、1年間にボランティア活動を行った人の割合は28.9%とも報告されています。

少子高齢化、環境問題の深刻化、地域コミュニティの希薄化、長期滞在の外国人の増加など大きく社会が変化して、多様なニーズが生まれています。しかし、行政だけでは対応できないことから、さまざまな分野でボランティアの果たす役割、期待が大きくなっているのです。



阪神・淡路大震災の被災地で救援物資を運ぶボランティア

© 阪神大震災記念人と防災未来センター

ボランティアの力で蘇った海

阪神・淡路大震災の2年後の1997年、ロシア船籍のタンカーからドラム缶3万1千本分の重油が流れ出し、日本海が重油に覆われるというナホトカ号重油流出事故が起こりました。海と漁業を救うために全国各地から駆けつけたボランティアは地元住民とともに、真冬の厳しい寒さの中、バケツとひしゃくで重油をすくいました。このとき活動したボランティアは30万人。そして、蘇るのに5年はかかるといわれていた海は、4ヵ月で蘇りました。

阪神・淡路大震災のときには、数多くのボランティアが駆けつけたもののコーディネーターが少なかったために、震災直後はボランティア側も受け入れる側も混乱するケースが見られました。しかし、このときの反省から、災害が起こるとすぐに現地に災害ボランティアセンターが立ち上げられ、ボランティアの受け入れをするようになりました。ナホトカ号重油流出事故でも、ボランティア同士の連携や行政との連携が図られるなど、阪神・淡路大震災の教訓が生かされました。

ボランティアって何？



「ボランティア活動」に明確な定義はなく、時代や国によって異なりますが、一般的に「自発的に、他の人々や社会のための活動を、無償で行うこと」と考えられています。

日本では古くから、農作業を行うために集落の人々が互いに労働を提供しあう相互扶助の慣行がありました。現在も、各地域には、その地域の住人を中心に構成される町内会と呼ばれる自治組織があり、町内の清掃や祭りなどを行っています。これらは、社会のための活動という点では、ボランティア活動とも考えられますが、自発的な活動というより、むしろ共同体の一員の仕事として行われています。

日本では、「ボランティア」が「奉仕」と訳されたり、同義に使われたりすることがあります。しかし、「奉仕」は国や社会、目上の者に尽くすことであり、自由意思であるかどうかは関係ありません。そのため、「ボランティア」の自主的に進んで行うという主旨に反することから、最近は訳さないで「ボランティア」ということばが使われます。

学校での ボランティア活動



人びとのボランティア活動に対する関心が高まってくると同時に、学校教育にもボランティア活動を取り入れようという動きがあり、1998年以降、学習指導要領でボランティア活動が推奨されるようになりました。また、高校や大学の入学試験の際に、ボランティア活動歴を評価に含める学校もあります。しかし、いい評価を得るためにボランティア活動が行われることがあり、ボランティア活動の本来の意義が損なわれることから、ボランティア活動を評価の対象にすることには賛否両論あります。

どんな活動が多い？



全国社会福祉協議会が把握しているボランティア団体数は2005年現在、約12万4,000で、その活動内容は多岐にわたっています。最も多いのは「保健・医療・福祉」で、ついで「まちづくりの推進」「子どもの健全育成」「社会教育の推進」となっています。そのほかには、「文化・芸術・スポーツの振興を図る」「環境保全」「人権擁護・平和の推進」「国際協力活動」などがあります。

病院ボランティア団体は1960年代初めから活動しており、「保健・医療・福祉」の分野でのボランティア活動の歴史は長く、それだけ携わる団体も多くなっています。具体的な活動としては、病院などの医療施設での案内、車いすでの移送などがあります。また、急速な高齢化が大きな話題になった1980年代から、高齢者を対象とした活動も増えていきます。具体的な活動としては、高齢者や障害者の施設での介護や介助、交流

活動や老人や障害者を対象にした食事の調理、配達などが挙げられます。

ほかに、地域をよりよくするためのまちづくり、子供の自然体験活動のサポートや子どもたちの登下校や放課後の見守り、地域清掃や花壇づくりなどの環境美化活動、海外への物資送付などの国際協力活動、国際映画祭など大規模なイベントの運営サポート、観光地でのガイドなどがあります。また、近年、長期滞在の外国人が増加したことで、各地に日本語教室が増えていますが、これも地域のボランティアに支えられています。

最近、ボランティアセンターやウェブサイトなどを通じて、ボランティア情報を簡単に得ることができるようになったことから、こういった団体に属さないで、個人でボランティア活動を行う人も増えていきます。



地域の高齢者のためにお弁当を作るボランティア



中国から来た中学生に日本語を教える中国人と日本人のボランティア

どんな人が活動している？



ボランティア活動をしている人を職業別に見ると、専業主婦が38.1%、定年退職者が24.5%と、平日に比較的時間が自由に使える人たちが多くなっています（「全国ボランティア活動者実態調査報告書」平成13年度・全国社会福祉協議会）。日常的なボランティア活動の多くは、専業主婦や定年退職者に支えられているといえます。

過去1年間にボランティア活動を行った人の率を年齢別に見ると、30代後半から70代前半までは30%前後と高くなっています。しかし20代後半から30代前半は20%以下と低くなり、10代後半から20代前半は13.4%と最も低くなっています。（「平成8年社会生活基本調査」・総務省）

活動内容は年代や性別によって異なります。例えば、10歳代では「まちづくりのための活動」や「自然や環境を守るための活動」に関わる人が多く、30、40歳代は「子どもを対象とした活動」に関わる人が多いようです。また、高齢者に関わる活動は、50代後半から60代後半の女性が多く関わっています。



公園の清掃を行う小学生とお年寄りのグループ



小学生の登下校を毎日見守るボランティアグループのメンバー



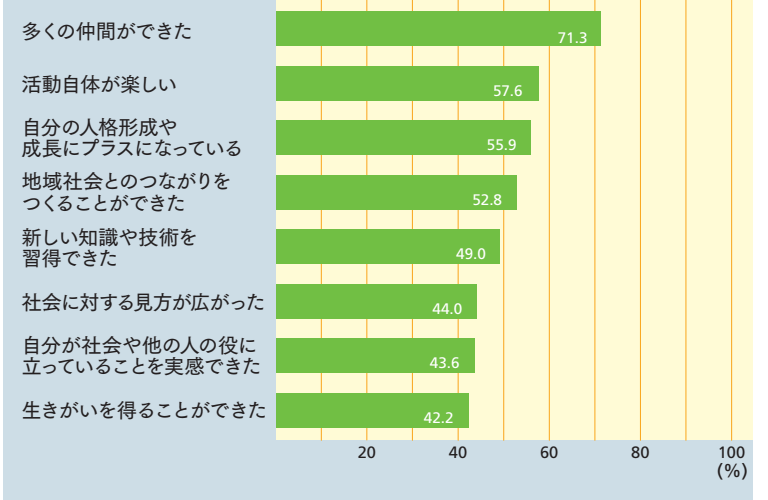
野球のリトルリーグのコーチを務めるボランティア

ボランティア活動に参加してよかったこと



ボランティア活動に参加した理由として、「社会やお世話になったことに対する恩返しをしたかった」(40.8%)や「困っている人を助けたいと思った」(34.5%)が多く挙がっていますが、実際にボランティア活動をしている多くの人々は、活動を通じて得たことやよかったことがあると考えています。ボランティア活動を通じて、仲間ができたり、自分の成長にプラスになったりと、自分にとっても大きなメリットがあったとする人が多くいます。

ボランティアに参加して良かったことはなんですか？



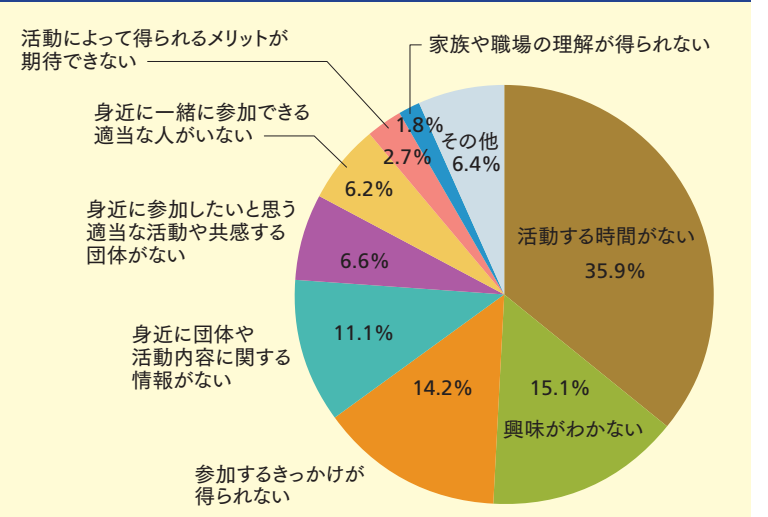
【全国ボランティア活動者実態調査報告書】（平成13年度・全国社会福祉協議会）

ボランティアに参加できない理由



国民生活選好度調査（平成12年度・経済企画庁）によると、国民の65%はボランティア活動に参加してみたいと考えています。しかし、実際に活動している人の数は、この数とは隔たりがあります。ボランティア活動をしたのに、実際にはできない理由は何なのでしょう。時間がないことが圧倒的に多いのですが、きっかけが得られなかったり、情報が得られなかったりすることも理由となっています。

NPOやボランティアなどに参加する際に苦勞すること、または参加できない要因はどんなことですか？



【国民生活選好度調査】（2003年・内閣府）

高校生のボランティア活動



ボランティア活動をしている人を職業別に見ると、専業主婦が38.1%、定年退職者が24.5%と、平日に比較的時間が自由に使える人たちが多くなっています（「全国ボランティア活動者実態調査報告書」平成13年度・全国社会福祉協議会）。日常的なボランティア活動の多くは、専業主婦や定年退職者に支えられているといえます。

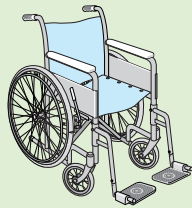
過去1年間にボランティア活動を行った人の率を年齢別に見ると、30代後半から70代前半までは30%前後と高くなっています。しかし20代後半から30代前半は20%以下と低くな

り、10代後半から20代前半は13.4%と最も低くなっています。（「平成8年社会生活基本調査」・総務省）

活動内容は年代や性別によって異なります。例えば、10歳代では「まちづくりのための活動」や「自然や環境を守るための活動」に関わる人が多く、30、40歳代は「子どもを対象とした活動」に関わる人が多いようです。また、高齢者に関わる活動は、50代後半から60代後半の女性が多く関わっています。

途上国の車いす修理活動

栃木県立栃木工業高校は福祉機器製作部(部活動の一つ)の生徒が中心となり、地域の社会貢献を行う団体やNGOなどと協力して「栃高校国際ボランティアネットワーク」を結成し、1991年から、県内外の病院や福祉施設などで使われた中古の車いすを修理して、海外に贈る活動を続けています。これまでにタイ、フィリピン、マレーシア、ネパール、中国、韓国、インド、スリランカ、ケニアなど21ヵ国に約1,785台を送り届けました。これは、「空飛ぶ車いす」活動と呼ばれ、現在では日本中に約50校の参加協力校があります。*1



同高校ではこの運動と関連した活動として、タイに「国際交流タイボランティア活動」を行っています。毎年、十数名の生徒が8日間の日程で訪問し、車いすの寄贈先を訪ねて修理をしたりタイの人々と交流の機会を持ったりしています。現地での修理は大変な作業ですが、参加した生徒の一人はこのような感想を述べています。

「(修理活動4日目には)みんなに疲れがたまっているのが明らかにわかりました。しかし、弱音を誰一人として吐きません。皆が一つの目標に向かって走っているのだから。修理が終わって帰ろうとするとき、タイの人々が、いつまでも手を振ってくれていた時、この活動に参加して本当によかったと思いました。」

*1 この活動は『空とぶ車いす』（文：井上夕香、画：鴨下潤、素朴社刊、2008年）の中で紹介されました。

栃木県立栃木工業高校ホームページ：
<http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigikogyo/>



©栃木県立栃木工業高校

ユース国際ボランティアフォーラム (Youth International Volunteer Forum)

2004年から年に1回神奈川県で開催されている、国際ボランティア推進のためのイベント。世界の諸問題について高校生が調べたことや行動したことを、特に同世代に向けて発信し、彼らが国際ボランティアを身近に感じ活動に参加するきっかけになることをねらっています。企画・運営は地元の高中生による実行委員会が行っています。実行委員は、実行委員長、事務局長、次長など9つの役割に分かれ、企画、渉外、広報、当日の運営などの業務を担います。

2008年3月に行われた第5回フォーラムでは次のようなことを行いました。

- 展示(児童労働、ストリートチルドレン、温暖化、飢餓)
- 基調講演: 私たちができる国際ボランティアについて (外部講師の講演)
- その他: チャリティーイベント、参加型ボランティア(手話講座、紙芝居の作成、文具支援)、県主催のベトナムへの青少年ボランティア派遣団参加者の報告



© TJF

人の役に立ちたい

シヨーン

高校2年生、17歳
神奈川県在住



子どもたちのためのボランティア

ボランティアを始めたのは中学2年生の頃です。僕の学校はキリスト教系の中高一貫校で、ボランティア活動をする委員会「愛の運動委員会」があり、僕はそのメンバーとして活動しています。ボランティアはいいことだと思っていたし、人を助けることにも関心があったし、また、友だちがその委員会に入るといって入りました。

委員会では、月に一度くらい日曜日に、さまざまな事情で親と離れて暮らす子どもたちの施設を訪問して、子どもたちといっしょに遊びます。委員会の最大の行事はクリスマス会で、毎年12月に施設の子どもたちを学校に招待して行きます。この活動はもう30年以上続いています。全校生徒に参加を呼びかけて、子どもたちと体育館やグラウンドで遊んだり、ゲームをしたり、学校のブラスバンド部の演奏会を行ったりして、一日中楽しめます。

子どもと生徒の2人でペアを組んで遊びますが、仲良くなって「もう帰りたくない!」と言われたこともあります。彼らが喜ぶのを見るのは楽しみです、子どもたちと接して、心が洗われるような新鮮な気持ちにもなります。

飢餓問題について学ぶ

去年の夏、この委員会の先生の紹介で、「高校生公益活動リーダー塾」という活動に参加しました。福祉や国際的な公益分野



高校生公益活動リーダー塾で班ごとに意見を出し合う

©高校生公益活動リーダー塾

の活動に関心を持つ神奈川県内の高校生約30人を対象にした活動で、次世代のリーダー育成をめざして、8月に2泊3日で開かれました。

専門家から市民社会や国際公益活動、障害や児童虐待などの現状について話を聞いたり、活動に必要なスキルを学んだりしました。さらに参加者の関心によって四つの班に分かれ、班ごとにプロジェクトを考えて、発表しました。

僕が参加した「医療・生命」班は、飢餓問題をテーマに選びました。飢餓の現状を知ってとても驚いたし、日本人にも身近な問題だとわかったからです。例えば、世界では8億人以上の人が常に飢えていること、その一方、日本では毎年2,000万トンの食糧が捨てられること、この2,000万トンの食糧があれば7,000万人が1年間食糧に困らないこと、日本も40年程前まではユニセフの食糧支援を受けていたことなど、いろいろなことを学びました。そして僕たちは、問題を解決するためには、単に食糧支援をするだけでなく、人々が自らの力で食糧を確保できるようにすることが大切だと考えました。また、子どもたちが学校給食で栄養を取れば、授業に集中できるし、就学率も上がるし、将来に希望を持って自らの問題解決に取り組めるのではないかと考えました。

そこで僕たちの班の6人は、チャリティー（慈善）イベントを開いて飢餓の現状を地元の小学生に伝え、集めた資金を途上国の給食支援のために寄付する企画を考えました。

学んだことを行動に

リーダー塾の終了後も班のメンバーで相談し、自分たちにできることを行動に移したいと考えて、このチャリティーイベントを実現するための活動を続けました。

必要な経費を集めるために、イベントを行う小学校の地区の商店を1軒ずつ訪ねてイベントの目的を説明し、寄付をお願いしました。すると、目標の2倍以上の金額が集まりました。初めて会うお店の人に高校生が寄付をお願いするのですから、甘くはな

いと予想していたので、この結果には驚きました、とてもうれしかったです。

12月の日曜日に行ったイベントには、多くの子どもたちが参加してくれました。楽しみながら、飢餓問題について学べるよう、

いろいろな工夫をしました。模造紙20枚以上を使って飢餓について展示し、サッカーやわなげなどのゲームも用意しました。また、フリーマーケットでは、メンバーの高校で集めたぬいぐるみや文房具を販売しました。小学生たちは、想像もできないような大変な生活をしている世界の子どもたちのことを知って、驚いたようでした。小学生に飢餓の実態を知ってもらえたと確かに感じました。フリーマーケットなどで集めた資金15,000円あまりは、すべてWFP(国連世界食糧計画)に寄付しました。

イベントの直前は準備をするために、週に3、4回集まらなければならなかったのが大変でした。でも、世界のいろいろな問題の実態を調べただけでなく、その原因を調べ、解決に向けて自分たちには何ができるかを考えて、行動に移すことができました。とても有意義な活動で、濃い時間を持てたと思います。

多くの人に伝えたい

リーダー塾の参加者の多くはこのようにそれぞれ活動を続け、今年3月の「ユース国際ボランティアフォーラム」(YouFo)*の開催にも携わり、これまでの活動について発表しました。今年には8校の34人がYouFoの実行委員になり、企画や渉外、運営など全てを高校生が行いました。僕は副実行委員長を務めました。

当日はリーダー塾の班活動の成果に基づく四つの展示、講師による基調講演、ベトナムへの青少年ボランティア派遣団の報告、手話講座など、さまざまなプログラムを行いました。若い人を中心に約200人が来場し、当日のアンケートを見ると、「すばらしい学習成果だと感心した」「ボランティアを一度やってみたい



小学校で開いたフリーマーケット

© 龍谷社公益活動リーダー塾

と思った」「毎年参加したい」などの反響がありました。

考えたこと学んだこと

リーダー塾やYouFoに参加した、僕と同じ学年の仲間の多くが次回も参加しますが、僕は今回でやめることにしました。高校2年生になって塾に通う友だちが増え、受験を意識するようになったのです。将来の進路について考え、勉強を優先しないといけなと思っています。

YouFoの実行委員は1、2カ月に1回くらい、役員はそれ以外に月に2、3回集まり、さらに展示の準備をするための班活動もあります。会合は平日の放課後5時から9時までかかり、家に帰って落ち着くと10時になることもありました。その上、分担した作業を家ですることあり、負担が大きかったのですが、自分で決めたことなのでやり通そうと思いました。

また、学校のクラブ活動などと重なるとYouFoの会合に出られず、フラストレーションを感じることもありました。会合をよく欠席するメンバーもいて、どうやってみんなで情報や考えを共有するかは難しい問題でした。YouFoの活動内容についても、ボランティア活動をするのと、その活動について発表することの二つのうち、後者が中心になっていないかという疑問の声もあります。これには僕も共感する部分があります。

でも活動を通じて得たことはたくさんあったので、参加してよかったと思っています。まず飢餓問題の知識を得たこと。それから、展示にあたりどう工夫すればよいか話し合い、みんなの意見を反映しながら作り上げていく大切さを知りました。活動の仲間やボランティアをする相手の人と、どうやってより良い関係をつくるかも学んだと思います。一つのことを成し遂げた達成感や充足感も得られました。違う学校の仲間といっしょに活動するのは、時間や場所の点で大変でしたが、挑戦したいと思いました。苦勞して努力したからこそ、形になったときに喜びを感じるのだらうと思います。

僕たちの活動の要は人です。多くの高校生に、こんな意識を持ってこんな活動をしている高校生がいたら伝えたいと思います。そのためには、もっと高校生を惹きつける工夫が必要でしょう。ボランティアと言うと敬遠されてしまうので、それを前面に出さないで、高校生が関心を持つことと結びつけるとか、魅力的なキャッチコピーを作るとかできたらいいでしょうね。それは究極の課題かもしれません。YouFoの活動はやめても、これからも学校の委員会でボランティアをしながら考えていきたいと思っています。

将来の夢は医者になることですが、これも「人の役に立ちたい」という気持ちから選んだ道です。もし夢をかなえることができれば、地域密着型の医療に関係していきたいです。

* Youth International Volunteer Forum の略。詳細は「今日日本」を参照。

この原稿は、シヨーン(愛称)さんへのインタビューをもとにまとめました。



さまざまな問題について高校生が調べてまとめたポスターに見入るYouFoの来場者